大縄跳びで交流。子どもたちは大喜び

言葉は違っても、気持ちは通じます

ポルポト時代の話を聴く参加者たち

地雷で足をなくした人も、畑仕事などして懸命に生きています

アキラの地雷博物館を見学。カンボジアには現在も数百万という数の地雷が残っています

強い心こそ今の日本に必要
社会の役に立つ大人になりたい

岡山操山中学校　2年　港（みなと）　拓実（たくみ）

2006年1月5日、僕は真冬の日本から真夏のカンボジアへと旅立ちました。

この旅は、瀬戸内市在住の中学生がカンボジアの現状を体験し、ボランティア精神やグローバルな考え方を身につけることを目的とした4泊5日の研修旅行でした。

この研修に行きたいと思った理由は、1年前デゥオン君という18歳のカンボジアの青年を自宅にホームステイさせたことからでした。それまでカンボジアにはあまり興味がなかった僕にカンボジアへの興味を持たせてくれたデゥオン君に再会できるといいなと思ったからです。

カンボジアはベトナムホーチミンで飛行機を乗り継がなくては辿（たど）り着けない遠い国でした。カンボジアは日本の気候とはまるで違い、冬でも30度を超えていると聞いていましたが飛行機を降りた途端、とにかく暑くて聞いただけでは思いつかない暑さを身をもって体験しました。

まず、バスに乗り夕食を食べに行きました。その間、バスガイドのキムさんという人にカンボジアについて説明してもらいました。僕はカンボジアは戦争続きの発展途上国で貧しい国ということを聞いていましたが、たくさんの立派なホテルが立ち並んでいることに大変驚きました。キムさんの話によると5年前くらいからたくさん建てられはじめたらしいとのことでした。カンボジアでは、人の真似をしてお金もうけをするらしく、日本のように自分で考えて商売ができないということでした。ホテルでもうけた人がいたので、たくさんの会社が真似をしてホテルを建て、こんなホテル街になったのだと言われ驚きました。

市内のレストランに着き夕食を食べたのですが、僕の予想をはるかに超えた食べ物が出てきて驚きました。30度を超えている真夏に野菜や肉を煮込んだなべ物が出たからです。あっけにとられたのですが、これがこの国でよく食べられている料理と知りました。僕たちみんな汗を流しながら食べましたが、少し薄い味で日本のなべ料理の水だきのようでした。

次にカンボジア人のアキラさんが所有している地雷についてとても驚いたことがありました。地雷を作るために必要な金額は2ドル程度なのに掘り出すためには何百ドルもの大金が必要だということです。このカンボジアにはまだたくさんの地雷が埋まっています。そして、その地雷のせいで足などがなくなった人も数しれません。戦争は終わったというのに、とても残念に思います。

しかし、カンボジアの人たちとの交流では、とてもすごいと思ったことがありました。それはどんなに貧しくても、体に障害があっても僕たちに明るい笑顔で接してくれたことでした。地雷という悪魔と対等に向き合う生活の中で笑顔を心の中から出せるということに僕は感動しました。どんな大変な時代を過ごしてきても決して曲げない心の強さを感じさせてくれたカンボジアの人たちに感謝の気持ちを送りたいと思います。

この交流の中で僕は、井戸掘りの体験をさせてもらい、ジャックフルーツの苗木を植えるための穴を掘ったのですが、とにかく力仕事の大変さを経験させてもらいました。

井戸は貴重な水資源。参加者一人ひとりが井戸掘りに挑戦しました

最後にアンコールトムやアンコールワットに観光に行きました。遺跡はとても大きな雄大さで広がっていました。遺跡の壁の側面にはたくさんのレリーフがあり、カンボジアの歴史が自分に伝わってくるかのようでした。例えばカンボジアの王様や王様に従う兵隊たちなどさまざまなものが描かれていました。とにかくアンコールワットから見た景色はとても素晴らしくて感激しました。

僕がこの研修で地雷のことやカンボジアの方たちとの交流を通して学んだことは心の強さでした。地雷にも貧しさにも負けない強い心こそ今の日本に必要なのだと僕は教えられた気がします。この研修を生かし社会の役に立つ大人に成長していきたいと僕は思っています。結局デゥオン君には会えなかったのがとても残念でした。

短い間でしたが僕たちを引率してくださった市の職員の皆さん、本当にお世話になりました。そしてありがとうございました。

何かに取り組むことは本当に大切で、素晴らしい事なんだと思い直すことができました。

たったの4日間ではカンボジアの表面的な部分しか見ることができませんでしたが、毎日安心して生活できることは普通ではなく、普通とか平凡というのはとてもありがたいことだと気づきました。私は日本という平和な国に生まれてきて、幸せだと思います。中学生として生きていく中で大変なこともあるけれど、とても幼い子どもたちが働いている姿を思えば頑張っていける気がしました。

私は今回の体験を無駄にすることなく、世界の国々をもっと知り、世界を知ることで私の生まれた日本の本当の姿を見つめ直したいと思いました。それぞれの国々が平和になってほしいと願います。

こうして5日間の交流事業が無事終了できたのは、お世話してくださった代表の村田さんや同行してくださった瀬戸内市の職員の皆さんがいつも見守っていてくれたおかげだと思いました。いろいろとありがとうございました。そして、一緒に5日間を過ごした友達にも、カンボジアの皆さんにも、「オークン　チュラウン」（ありがとうございました）